

## 先 見 の 明

副会長(名古屋市立山田中学校長)

藤松 真人 (S59 卒 第5期生)

「主体的・対話的で深い学び」、「ICT 機器、タブレット PC の活用」。令和3年度は中学校の教育活動においてこれらの言葉を頻繁に耳にした年でした。各学校では新型コロナウイルス感染症への対応とともに、大幅な授業改革にも追われた1年間だったと思います。

平成9年。私は名古屋市教育研究員として、当時、日本の学校教育を牽引していた多くの方々からご指導いただくことができました。元文科省視学官の小原光一氏、文科省調査官の金本正武氏、名古屋大学の安彦忠彦教授などそうそうたる顔ぶれです。このような方々が名古屋市教育研究員というだけで、わざわざ時間をつくって自分と面談していただける、「何て素敵な制度なんだろう」と思いました。今から24年も前のことです。その中で、当時、大阪府立淀川工業高校の教諭だった高嶋昌二先生、文京区立第十中学校の教諭だった滝浦 盛先生からのご指導は、文頭の言葉との関りを強く感じるものでした。

高嶋先生は合唱部の練習風景を見せてくださいました。部員は男子のみ。4人一組でグループを作り、グループに1台ずつ鍵盤ハーモニカが配られていました。衝撃を受けたのは鍵盤ハーモニカで音程を確認した後の様子でした。発声、強弱、表情づくりなど、曲にふさわしい表現方法について、4人がそれぞれ活発に意見を出し合っていました。さらに言葉のやりとりだけではなく、互いにチェックし合いながら場面に応じて必要な技能も身に付けていきました。ほぼ1時間の練習の中でみるみるうちに曲が仕上がっていったのです。他のグループも同様で、校舎内のあちらこちらから話し合いや歌声が聞こえてきました。この間、先生からの指示や指導は1度もありませんでした。この高校では音楽の授業は無く、新入部員は楽譜が全く読めないというのも驚きでした。

滝浦先生は、当時、範唱 CD にも名を連ねるほど有名な合唱指導者でした。また、創作活動において初めて本格的にコンピュータを導入した先駆者でした。先生が開発したソフトは、誰もが自分で曲を作ることができることにこだわっていました。最初にマウスでメロディラインを引き、その後は直感的に音符を並べていくだけでまとまりのある音楽ができていきました。創作した音楽をその場で再生できることも当時は衝撃的でした。先生は最後にこう述べていました。「作った曲をコンピュータの中に留めてはいけません。自分の曲を自分の力で演奏することで創作活動は完結するのです」 これらの内容は、現在の学校教育の中では、ごく当たり前のことですが、24年も前にすでに構築していた人がいたということと、その先見性に今さらながら感銘を受けてます。

## ♪♪令和4年度 研修会のご案内♪♪

【日 時】 令和4年8月6日(土) 10時より総会、10時15分より研修会

【会 場】 名古屋音楽大学 ※コロナ禍のため、懇親会は行いません。

【テーマ】 「音楽療法とは」&lt;仮題&gt; 講師：猪狩 裕史 先生(名古屋音楽大学准教授)

音楽を用いて、「人を元気にする」「健康を支援する」こと。これが音楽療法です。

(~2022 大学案内より~) 分かりやすくお話していただけますので、初めての方も心配いりません。音楽科教員として、ぜひ知っておきたい分野です。特別支援教育を担当されている方はもとより、通常の学級担任の方にも役立つ情報が得られるのではないかと思います。

※ 終了後、校種別情報交換会を行います。

※ 研修会は、感染状況により、リモートで開催する場合があります。



## 子どもに十分な表現の機会を！

名古屋市立平和が丘小学校教諭  
笠羽 真澄 (H18 卒 第 27 期生)

今年度は転勤で新しい環境になった。6年生の学級担任を持ち、自分の学級の音楽の授業も行えるようになった。初めての音楽の授業で校歌を歌わせた時、驚いたことがあった。それは、最高学年で歌い慣れているはずの校歌なのに、小さな声でボソボソと歌っている姿が見られ、中にはまともに口が動いていない様子があった。自分が想像していた歌声ではなかった。子どもにコロナ禍が始まって以来の歌唱活動の様子を聞いたら、器楽合奏ばかり行っていて、ほとんど歌唱していないとのことだった。儀式的行事でも歌いにくくなった校歌だが、大切な校歌を子どもが忘れてしまったのかと思うぐらい心配になった。

音楽科は活動制限が明記されているが、歌唱を含め、十分な表現の機会を作らないといけないと強く感じた。私は特別な手立てを打って授業を行っているわけではない。またそれぞれ学校規模や環境が違う中でできることやできないことがあると思う。みなさんが当たり前のように行っている内容だと思うが、私が行ったことを伝えていきたい。

## ① 歌唱ができる環境づくり

合奏を主に行っていた音楽室は、児童が座る椅子の間隔が近く、いろいろな楽器が音楽室にあふれていた。まずは児童が1メートル以上の距離を保ち、歌唱ができる状態にしなければいけない。あまり使わない楽器は、音楽室準備室にしまい、広々とした教室に、間隔を広げて椅子を並べた。私の勤務校は、小規模校であり、1学級多くても30人前後なので、なんとか全員が広く間隔を開けて学習することができる。また、音楽室は普通教室から離れた場所にあり、音楽室前の廊下を利用して楽器の音を出したり、歌ったりした。

## ② 鍵盤ハーモニカやリコーダーに代わる楽器の活用

名古屋市では、間隔を十分にとったうえで鍵盤ハーモニカやリコーダーが演奏できた時期もあった。しかし、感染者が増えるとまた演奏できない日々が続いていく。その時には卓上鉄琴やオルガンやアコーディオンなど、校内にある楽器を活用した。また、打楽器を使ったり、ボディパーカッションで表現したりして旋律以外の演奏も充実させた。一人一つの楽器が使用できないときには、2~3人で楽器を共有しながらグループで活動した。友達の演奏を聴くことも大切な活動であることを伝えた。

## ③ 表現を深めるための話し合い活動

ペアやグループで曲の歌詞や曲想をもとに、感じ取った曲のよさを友達と話し合った。例えば「おぼろ月夜」の歌唱曲では曲の盛り上がる場面について個別で考えたことを基に友達と話し合いをして、どのように歌いたいかを思いをもたせ、歌唱活動につなげる。以前からよく行っている授業展開だと思うが、コロナ禍で十分に歌えない環境が続くなか、時間をかけて活動することで、より曲について理解することができた。歌うことができなくても、楽曲に向き合う時間が増えたことで、よい表現をしようという意欲が高まる場面が見られた。

## 【編集後記】

◆コロナ禍での音楽の授業も3年目に入りました。今回も工夫をされてこられた授業実践を寄稿していただきました。◆同窓生で箏曲演奏家の後藤礼奈さんが中学校の鑑賞教材「六段の調」の動画を作成されました。これを使って授業をされた先生から「とても分かりやすい」と高い評価を得ています。めいおんの会FBまたはYouTubeから見ることができます。◆令和4年度の「音楽療法」研修会。教室の子どもたちを見渡してみると、私たち教師が知っておきたい音楽分野であると感じます。ぜひ、多くの先生方が一同に会し、情報交換ができることを願っています。◆新学習指導要領の実施、タブレットの活用など、教育界は目まぐるしく変化しています。このような時であればこそ、会員相互の交流が一層活発になることを願っています。(ゆ)



